

## 2. 創 立 以 前

我が国における測器による気象観測の最古のものは、約200年前の安永年間の長崎におけるスウェーデン人ツンベルグによるものではないかといわれている。北海道における最初の観測は、箱館奉行 村垣淡路守範正の公務日記に残っている安政元年(1854)～安政五年(1858)の風・天気・気温・地震・雷などの観測である。

安政元年の神奈川条約(批准は翌年)によって、箱館にも外国船の入港が認められるようになったころでもあるから、必ずしも日本人自身の手による観測であると断定はできないが、外来の気象測器を用いた観測であることに間違いない。

続いて、箱館開港の安政六年と翌年の万延元年(1860)の2か年間に、ロシア領事館の医師アルブレヒト(Albrecht)による箱館における気温観測がある。2年目には、雨雪日数も記録している。この観測はその後3年間、文久三年(1863)十二月まで、全部で5か年間続けられたという記事(気象百年史)もある。終わりの6か月だけは、同じロシア人コストロフ(Kosteroff)が引き継いでいる。

函館気候測量所における気象観測につながったイギリス人トーマス・ブラキストン(Thomas Wright Blakiston)による雨雪日数の観測は元治元年(1864)から、気温・気圧の観測は慶応四年(明治元年, 1868)から行われている。明治五年に、函館気候測量所初代所長の福士成豊によってこの観測が引き継がれるまで、箱館戦争中も通して観測は続けられた。

明治二年五月の五稜廓における榎本武揚ら幕軍の降伏により、戊辰戦争も終局し、この年、北海道開拓使が設置され、蝦夷地は北海道に、箱館は函館に改められ、開道の幕が開かれた。開拓使次官 黒田清隆は、ワシントン駐在の少辨務使 森有礼を介して、当時のアメリカ大統領グラントに開拓顧問役の推薦を願い出た。推挙されて明治四年六月(新暦の8月末)開拓顧問団長として来日したのが農務長官ホールズ・ケプロン(Horace Capron)であった。

ケプロンは早速、随行のアンチセル(Thomas Antisell)とワーフィールド(A. G. Warfield)を本道に派遣し、約2か月間、現地調査に当たらせた。この時、福士成豊もこの巡回に同行しているが、アンチセルは特に北海道の気候も重点の一つとし調査した。ケプロンはこ

の2人の報告と函館におけるブラキストンらによる気象観測の成果もしんしゃくして、本道開拓の有望なことを、開拓を進めるうえで気象の観測が重要であることを強調し、開拓使本府を札幌に置くべきことを報告した。

アンチセルが滞在中の体験と調査を基にして、翌明治五年九月に、黒田開拓次官に提出したいわゆる「気候説」と題する論文は著名である。これは、本邦において初めて暴風警報の必要を建白したもので、同時に、気象観測所を設けて気象電報による通報を実施するように進言して、結語としている。

気象を重視したのは、団長ケプロン、アンチセルだけではなく。アンチセルの後任として、明治五年十一月から開拓に参画したライマン(Benjamin Smith Lyman)も、明治7年11月のケプロンへの報告の中で、暴風警報と気象通報組織の必要を提唱した。

また、本道の開拓が国費の浪費であるという世論が高まった明治8年には、ケプロンは、「北海道における気象の実態を把握することなく、推測だけで非難するのは不当である」旨の反ばく意見書を開拓使長官に提出している。

アメリカ人顧問団一行のこのような姿勢が、開拓使関係者の気象に対する認識を深め、後の北海道における気象事業を開くうえに、あずかって力となったことは否めない。

明治五年七月二十三日(新暦は8月26日)には、開拓使3等属 福士成豊の建議が採用され、ブラキストンからの観測を継いで、本邦初の測候所として函館気候測量所が発足した。

このころと相前後して、明治四年十月十五日から翌五年七月二十九日まで、開拓使の後志国余市郡出張所として、その開墾地で、1日5回の気温・天気を観測した寒暖晴雨表があり、また、明治五年の宋也郡(原文のまま、多分宗谷郡)における日記には、晴雨儀と寒暖計による気温・気温・天気・風の観測記録も残っている。

札幌におけるまとまった気象観測記録としては、その企画者、観測者は不詳であるが、明治7年の1年間、虻田通り第1号官邸(今の中央区南2条西3丁目と推定される)で行ったものが知られている。もちろん、この観測は開拓使として実施しているが、「開拓使日誌」の中には、この観測年報と共に次の一文がある。

「明治8年1月10日 本庁届

昨7年中晴雨計並ニ寒暖計 庁下虻田通第1号官邸ニ於テ試験ノ分製表其係ヨリ差出候ニ付 別紙相副此段御届仕リ候也」

明治8年6月1日には、英人ジョイナー (Henry Barton Joyner) の建議が発端となって、東京赤坂葵町で、内務省地理寮測地課の仕事として、気象業務が開始され、これが現在の気象庁業務の前身となった。

これより先、明治五年には、ケプロンの勧告が契機となって開拓使所属の開拓仮学校が東京に置かれたが、その後、幾多の変遷を経て、明治8年には札幌に移され、翌9年8月に札幌農学校として開校することになった。これが現在の北海道大学に発展するのである。アメリカから教頭として迎えられたのが “Boys, be ambitious!” で有名なマサチューセッツ農科大学学長であったウィリアム・クラーク (William Smith Clark) である。同行して札幌に赴任した教師団の一人に、数学・土壌学担当のウィリアム・ホイラー (William Wheeler) (写真1) がいた。

このホイラーは、開校した翌月の明治9年(1876)9月1日から、札幌区東創成通りの教師館(当時はまだ旧本陣と呼ばれていたものらしい)内で、自らの手で気象観測を始めた。これが札幌における気象事業の発端であり、我が国で3番目の気象官署の発足となったのである。

札幌農学第1年報(明治10年11月、開拓使刊行)の中



写真1 来日当時のウィリアム・ホイラー  
(北海道大学所蔵)

で、ホイラーは次のように報告している。

「観台ノ事業ハ1876年9月1日ヨリ余ガ科ニ於テ之ヲ創起セリ故ニ別紙ノ観像記ハ其時ヲ以テ起頭ト為セリ」さらに「此事業ハ本校ノ管理ヲ以テ農業上ノ試験ヲ行フニ当リ一大肝要ノ元素タルヘク又生徒教育ノ貴重ナル種子トナル」とある。札幌農学校、あるいはホイラー自身が始めた気象観測の事業を開拓使が直ちに採り上げたのが、札幌測候所の創業であるといえる。

(佐藤義彰)